
死神達の恋歌～太陽の導き～

yatenyue

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神達の恋歌〜太陽の導き〜

【Nコード】

N1850Z

【作者名】

y a t e n y u e

【あらすじ】

精霊術師のうち、彼女一人以外いないと思われている水術師である雛桜 卯月。

13の時彼女は双子の姉を亡くした…

月の現世サイドです。

ヒロイン×雨竜になります

月、太陽共通プロローグ

私は

私の姉の美月は

あの日 死んだ

《零番隊隊長、兼元十番隊第三席副官補佐》

雛桜美月

M i t s u k i H i n a z a k u r a

サダメ

最も辛き運命を持つ者

「日番谷隊長には、桃ちゃんがいるし」
勘違い

すれ違い

「大好きっっ」

「消えて」

「・・・仕方ないよ。」

冬獅郎にとって、桃ちゃんは、姉か妹みたいなんだと思うから。」

垣間見たのは、柔らかな微笑

「絶対、ルキアは助けてあげるから。」

何度 別れてもなんで私は、恋をしてしまうんだろう？

大きな罪を私は、背負っているのに。

「・・・卯月が私に・・・？」
贖しよく 罪ざい？

「よくも冬獅郎を藍染つ！！」

紅アカと赫アカと朱アカを纏い、

哀アイと愛アイとに満ちる

心優しき少女

「嘘・・・でしょ。卯月が消滅キエするなんて！！」

これが 罰 ？

哀しくも愛しい そして

残酷な 物語が 今紡がれる

それはまるで影のように

美月は満月ミツギキのように。

《十番隊隊長》

日番谷冬獅郎

Toushiro Hitsugaya

氷と雪を操る炎の対。

美月の第一印象は、抜けたヤツ。

第2印象は、失礼なヤツ。

第3印象は、可愛いヤツだった。

気が着けば、美月を目で追っている自分がいた。

松本のヤツにからかわれても、否定できなかった。

「俺は、お前が好きだ。」

あいつは、いつも自分のことより、他人のことばかり考えていた。

良く言えば、優しい。

だが、

悪く言えば、自分を軽く見ていた。

夢い。

強いが、弱い。

だからこそ思ってたんだ。

護ってやりたいと。

今まであいつに会うまで、護りたいヤツは雛森だけだった。

俺にとって姉であり、妹であつたから。

でも今は、できるならば美月の笑顔と心

そして欲張りかもしれないが、

雛森のことも護ってやりたい。

そう思うんだ。

「雛森に血イ流させたら、
俺がお前を殺す。」

血を流す雛森

涙を流す美月

血を流し倒れる俺にすがりつく美月
もっと、強くなりたい
消え行く意識の中

感じたのは、暖かな炎。

《水術師》

雛桜卯月

U d u k i = H i n a z a k u r a

血の呪いを受け継ぐ者

「私のせいだ。」
モノクロ
白黒の世界。

姉の残した詩。
いつだって、私の心を救うのは、
あの子 なんだ。

たくさんの友達。

美月が死んで3年経っても、なお気にし続けた。

そして、

知らなかった周りの人々の思い。

嬉しかった。

でも、やっぱり逢いたいから。

ルキアもだけど、私の1番はやっぱり美月 なんだ。

そんな私が1番キライ。

皆傷だらけ。なのに私は無傷
美月は重傷。なのに私は護られ無傷。

「私が・・消滅^{キエ}する？」 聞いた時

生きたいという思いと、
やっと死ねるという思い。 2つ の矛盾した思いが胸に満ちた。

絶望への序章が
始まる。

黒崎 一護

I c h i g o 〓 K u r o s a k i

朽木 ルキア

R u k i a 〓 K u c h i k i

井上 織姫

O r i h i m e 〓 I n o u e

茶渡 泰虎

Y a s u t o r a 〓 S a d o

有沢竜貴

T a t s u k i 〓 A r i s a w a

小島 水色

M i z u i r o 〓 K o j i m a

浅野 啓吾

K e i g o 〓 A s a n o

卯月の

理解者達

そして・・・

クインシー
《滅却師》

石田 雨竜

U r y u u 〓 I s h i d a

救済者

「自分だけが不幸・・・？笑わせんな」

そう君は一蹴したね。

今までの僕の価値観を

だから、僕も言わせてもらう。

「罪？そんなの関係ないだろう。

君は逃げているだけだ。」 君を傷つけるかもしれない でも、

何も関係がなかったからこそ救える

《零番隊三席兼元四番隊三席》

大道寺 皐月

S a t s u k i " D a i d o u j i

共有者 優しき毒舌者

悟る者

あの子達は、本当に溜め込むのが好きですわね。

率直な優しさは、人を救うこともあります、

逆にそれが苦しくなることだってあるんです。

本当に見て居られない、太陽と月

「馬鹿ですわね。そんなことで迷うなんて」

「あなたは、思う通りにやればいいんです。」

「少しは頼りなさい。馬鹿娘ども。」

いつも、キツイ言葉である・・・不器用な

言葉・・・

でもそれは常に真を指している。

全てを認めている者。

《零番隊四席兼元三番隊三席》

神無月 由宇

Yuu Kanaduki

共有者

愛を拒絶する者

愛は、破滅への序曲。

アタシは、そう思わなきゃやっていけなかった。

・・・自分の想いも分からず、愛を知らず、走り続ける者・・・

でもあの子達には、幸せになって欲しいから。

「アタシは、そういうの分かんないけど、あんたは違つてしょ。」

「まあ、いいけど」

「イズル、どうしたの？」

アタシは、自分の気持ち

安堵の理由が

ワカラナイ

零番隊副隊長兼元二番隊副隊長》

如月 海依

K i s a r a g i 〓 K a i

共有者

信じようとする者

何度裏切られても、

人とは汚いものだと知っていても、

信じられようとし、

「どんなことがあつたって俺は俺だから。碎蜂、お前だけは俺を信じて下さい。」 大切な人

「信じるに決まっているだろうが」

また、信じようとする。

・・・男とも女ともとれない、不思議な者・・・

俺はさ、人間って弱くて醜いものだって知っている。でも、それを知った上で、

俺は信じたいんだ。

それに、俺は、この手にあるもの全てを護りたい。

俺が私（「女、弱さ」）を棄てた代わりに。

美月達？

あいつらもだよ。

あいつらは、あの時から罪だ　って気にしている。

そんなの気にしないでいいのにな。

俺や皐月達が言っても聞きやしない。

あいつらは、力は強い。

最強って言ってもいいくらいにな。（俺もだけど↑自慢）

でも、心の一部分が酷く弱い。

失うことを恐れている。

だから俺はあいつらを支える。

ただそれだけだ。

そして

「私は、彼のために強くなるの。」

《零番隊七席兼元十二番隊三席》

神代　魅

M i r u K a n e s i r o

改造された身体の持ち主

「たとえ私を思ってくれなくても
彼が幸せならそれでいいの」

「俺は、あいつのために強くなっただんだ。」

《零番隊六席兼元十一番隊四席》

須王 修宇

S y u u u S u o u

強さを求める者

「俺が本当に思っているのは
誰なんだ？」

すれ違う2人

「僕は、あなたに会いたくて、死神になっただけです。」

《零番隊八席》

那智 葵

A o i N a c h i

美月を尊敬する者

そして、血縁者

「僕に何ができるか

わかりませんけど

僕は僕にできることをやるだけです」

「何もしないって、性に合わないし」

《六番隊三席》

佐野 明良

A k i r a = S a n o

美月と同じ血を持つ者

そして 崇拜者

「あなたはあなたにできることを
すればいいの。俺はあなたを否定しませんよ」

《零番隊五席兼元六番隊副隊長》

青木 輝

H i k a r u = A o k i

愛に裏切られ、心を美月に救われた者
そして

裏切り者

残されたのは 1枚の手紙

「だいつきらいな人間を
もう一度信じたいと

おもったのは
美月隊長のおかげです」

さあ紡がれ始めるは、愛しくも、残酷な物語。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1850z/>

死神達の恋歌～太陽の導き～

2011年12月6日19時52分発行